スーダンの有用植物＜最終回＞

あとがきに代えて

本シリーズでは、スーダンにおける複数のJICA 技術協力事業のなかでこれまでに出会ってきた有用植物について数回にわたり紹介してきた。「有用植物」とは、人間にとって、さまざまな利益や役割を果たす植物のことをさす。有用とは人間生活にとって「役に立つ」ということである。しかし、有用か、そうでないかは、それほど明確に線引きがあるわけではない。たとえば、第6 回でとりあげたメスキートのように畑雑草として邪魔物扱いされがちな植物が、見方を変えると砂丘固定としての有用面があったり、薪・炭などの燃料資源として利用されたりする。また、ソルガム、コムギ、油料作物など一般的には食料源としての経済的特性に疑いようのない栽培植物についても、国・地域の歴史や文化の背景・文脈によってその価値は一定ではなく、相対的な側面が垣間見えたりする。

本シリーズでは筆者がスーダン業務にたずさわるなか、日常のスーダン人との交流から得られたささやかな気づきや知見の蓄積を記述してきた。スーダンの有用植物については、また機会をとらえて書いてみたいこともある。さらに動物文化や飼養家畜の有用性についても考究してみたいが、これらは将来課題とし、いったん筆をおきたい。

さて、本シリーズにかかり、最近のスーダン情勢とこの間の技術協力の活動状況についてもふれておきたいと思う。ご存じのとおり、スーダンでは、2019 年 4 月に軍事クーデタが発生し、30 年間の長きにつづいたバシール政権が倒れた。物価上昇、為替レートの悪化など国内経済が悪化・疲弊し、民衆の根強いデモ活動により大統領への退陣要求が強まりつつあるなかでの政変劇であった。その後、コロナ禍による都市封鎖、渡航中止の時期をへて、国内外での不安定な政治情勢下において関係者により政治合意の枠組み形成の努力が行われ、民主化の歩みへの期待が高まった。しかし、2021 年 10 月発生の軍部による揺り戻しの騒擾により、時計は再度逆戻りし、軍事政権が復活した。その間、われわれの技術協力プロジェクトは、安全管理の観点から、たびたび日本人の現地渡航が中断され、その都度、遠隔実施を余儀なくされた。しかしながらこのように困難な状況においてもプロジェクトは中止とはならず、継続することができた。2021 年のコロナ禍のなかで新規案件が立ち上げられ、今日実施しているリバーナイル州の技術協力プロジェクト（フェーズ２）に引き継がれた。プロジェクトでは、先行案件での成果を踏まえて、州内の灌漑スキームの農家支援を拡大して実施してきている。

ところが、プロジェクトが軌道に乗りつつあるなか、さらに不測の事態が発生した。2023 年 4 月の国軍と RSF（即応機動部隊）の対立・分裂とその後の首都ハルツームなどで継続する激しい武力衝突がそれだ。その結果、ハルツームをはじめ国内各地の荒廃・損失、多くの犠牲者や国内外への避難民を生み出し、たいへん憂慮すべき事態となった。幸いリバーナイル州は比較的平穏が保たれたことから、プロジェクトは継続されてきている。これにはリバーナイル州生産省、CP・NS 等の農家支援を継続するという強い意思とたゆまぬ努力がある。現在も軍事政権での主導権争いによる政治分裂や武力衝突などの不穏な状況がつづくが、スーダン人側関係者の思いと行動により、われわれ日本人専門家はなんとか遠隔支援を継続することができている。現下の情勢は依然として予断を許さないが、農家をはじめ CP・NS らスーダンの民衆は武力衝突の犠牲者であり、われわれも可能な限りスーダンへの技術協力を続けるつもりである。スーダン情勢の一刻も早い平和回復を祈りつつ、微力ながら農家支援の底支えをしていきたいと考えている。

CP らとの週例セミナーによる活動報告。日本人専門家はオンラインで参加している。